遺跡探索

リシュナの結末

深底に沈む女群、歯車からの解放

お試し版のため再度を下げています

お試し版

これまでの事（遺跡探索リシュナ）

リシュナは街で悪い噂の立つ格好からして目立つ女だった。
「ねえ、雇われてくれない？」
そんな彼女からの依頼に興味を引かれて遺跡探索に同行し
素性を探るつもりでいたが、思いはあっけなく砕かれる。
格好はそれでも中身は芯を持った女で、
探索の途中で話をする内に、噂が協会の息子の流した戯言（たわごと）だと知る。
噂によって雇える人間が見つからず、活動できなかった彼女が
どうしても調べたかった遺跡、それを最奥まで付き添う。

その奥で見つかった物は遺物でも財宝でもなく、
彼女が探していた『記録』の巨大石板だった。
危険とは無縁に思えた遺跡探索は、
その石板の突然の落下によって窮地（きゅうち）に陥るが
リシュナはそれを反射の魔法によって受け止める無謀な行動に出る。
身動きできなくなった彼女を今度は自分が走り抱えることで
共に潰れかねない危機を、無理やり切り抜けた。
直後、石板落下の衝撃で遺跡は崩壊を始める。
そんな中でリシュナは同行してくれた俺に報いるためと
落下してきた宝物、大判金貨４枚を装備を壊しながら取得、
疲労で動けなくなった彼女を抱えて脱出する。

金貨を半分ずつ分け一度は別れたものの、彼女の最後の言葉、
「自分にかかった忌（い）まわしい『呪い』を解きたい。
それにまつわる地名があの石板にあった。」
その言葉が忘れられず、街で彼女を探す。
時を置かずに再会を果たし、リシュナの呪いの一端を知る。
『悪魔の眼』そう言える症状を彼女は、
拒絶・流布（るふ）される危険もある中で
俺の「見たい」という言葉に応じてくれる。
不安(負)の感情に心悩まされ、目を合わせた者の精神を乱すその眼。
今この時、この世界にないものを見て、…そして興味を持った。
彼女の事に。

お試し版

これまでの事（荒ぶる拳闘娘）

リシュナとの生還の祝杯の後、酔いつぶれた彼女を宿に預けてきた際
とある女に絡まれる。
拳闘賭博を生業（なりわい）にしているその女は、自分も用があったという遺跡が
俺達によって崩壊させられ、詳細が掴めなくなり教えろという。
だがその反発的な態度と酒の入りによって拒んだ俺に
拳闘女リネッタは情報を賭けて勝負を挑んでくる。
最終的にとある部位を集中攻撃し沈めるも
彼女は色仕掛けに転じ、その際に『眼』を確認してしまう。
リシュナのみならず、自分の不調の原因を探す者がここにもいた。
彼女の行動に動揺しながらもその眼で察した俺は
リネッタに情報提供するための機会を作ると約束する。
悪魔の眼、そんな症状が一体どこから――。

悪酔いから醒めたリシュナと再会し、記憶転写魔法で
脳裏に焼き付けた石板の碑文全てが読み解けた彼女は
『白岩石の祭祀場（さいしじょう）』
という今では聞かない古い地名を示す。
俺も協力することを伝えるが、この時点ですでにリシュナは
記憶の文面から自分の体に何が起こっているかが分かってしまっていた。
魔眼という変化だけではなく、そもそも『呪い』ではない事を。
それがその時、俺に語られる事はなかった。

お試し版

これまでの事（手蔓を求む先の闇）

白岩石の祭祀場という古代の地名、街にある文献では見つからず
俺達は途方にくれるが、最後の手がかりとして選んだ場所、
『王立魔学院』

魔法・術による統治を目的として古くから各都市に根付く団体。
同時に古代の文献や記録を集積し、かつて昔にあった
古代魔法を復活させる目的を掲げている。
しかし一般人に理解されない不明瞭な活動も行っているため、
街の人間の中には不信感を持つ者も少なくなかった。
リシュナの魔眼を万一に気づかれては――という不安のため
あえて避けていた場所であった。

結果的には学院書庫に古代の地理を記す書物はなかったものの
そこに務める魔学士の提案により、
手つかずの学院地下の遺跡探索を許される。

そこで見つけた封印された一室と魔法でしか開かない古い本。

神代文字という古い文字が読めるリシュナはそれの解読を決意し
手空きとなった自分は終えるまでの間、
行きつけとなった酒場の姉さんの仕事を手伝う事にした。

この時、リシュナの変わりない様子を見て事態を楽観視していた。

お試し版

今は使われない魔法仕掛けの本、
答えがあると信じリシュナは地下で解読に没頭する日々を、
俺は彼女を支えつつ、店主のイゼラが営む酒場の手伝いを続けた。

だが、本に求める答えはなかった。
希望を絶たれたリシュナは感情的に。
そして自分と付き合っていては足枷(あしかせ)になると言い、
その理由として今まで語られなかった碑文の内容を告げてきた。
それは、彼女が人の精神をかき乱す眼だけでなく、
[redacted]か、[redacted]に
[redacted]しまっているという事実。
碑文は救済ではなく、ソレを造る手順書でしかなかった事。
心が負に堕ちて荒れるばかりでなく、[redacted]られない。
その事で俺が離れていくのが怖くて明かせなかったと彼女は謝罪し、
言葉を失った俺の前から姿を消してしまう。

彼女が調べた内の一冊が過去の歴史の記録である事を
せめてもと書き記し魔学院に提出。
リシュナの境遇に助力できず自分に何が出来るのか自問自答する。
そんな時に、同じく魔眼を持つリネッタとの再会、
現状と魔眼の事実を知った彼女からの言葉によって気づかされる。
「貴方は一緒にいる理由を、気持ちを『言葉』で伝えたの？」
…リシュナの事実にただ圧倒され、彼女が何に不安を感じているのか
正しく考えることも、伝えることもできていなかった。

本編のあらすじに続く

本編ではモザイクはありません

お試し版

遺跡探索

リシュナの結末

深底に沈む女群、歯車からの解放

剣と魔法があっても悪魔は過去のものとなった世界。
その過去の残滓は去ることなく人を蝕む。
沈みゆく人を救う方法は男の手の内になく、
ひたすらにただ、足掻くのみだった。

お試し版

＝抗(あらが)う術もなく＝

リシュナが解読していた荒れ放題の古代の部屋にて。

人ならざる気配が俺やリシュナだけでなく部屋全体包み込んでくる。
この女は一体なんなんだ…？
とても同じ人間とは思えない気を発している。
「原神…蓄体…。あんたは…一体、何を言っているんだ？」
「いずれ分かるでしょう。貴方にも来て頂きますから。
もっとも、その時にその知性が残っていれば、の話ですが。」
「邪(よこしま)な目的でリシュナに呪いをかけた事は、間違いなさそうだ。」
女の悪威に圧(お)されるが、
反発の感情でかろうじて言葉を吐く。
「呪いではなく、祝福です。
…配下の者に人選は任せてましたが、今回は失策が多いようですね。
上も予定通りには事が運んでいない様子…。
せっかくマキ様の力を預けたというのに…。
あの子達も、なってもらう他ありませんか…。」
「じ、じゃあ、貴方が――貴方が…わたしをこんな目に…！」
リシュナも精一杯抗いながら声を吐く。
「こんな目とは――ずいぶんと気丈な方のようですね。
楽しめそう。貴方達2人が絶望に飲まれゆく様はどんなものか、
見ものですよ…。さて――」
そう言うや否や、[redacted]の女の姿が消える。
瞬間に握っていたリシュナの手の感触も消える。
「ぐうっ！」
「!?」

本編に続く

お試し版

遺跡探索
リシュナさんの愚行
出会い
荒ぶる拳闘娘
リネッタさんの攻防
遺跡探索
リシュナの愚行
手蔓を求む先の闇
汚妹
ドラゴンUP
惑乱
41